資料編３．研究会による討論の記録

研究会による討論の記録は、できるだけ忠実に再現して掲載したが、プライベートな席での発言であり不適切な表現があったり、また編集者の理解によって発言者の意図が伝わらないなどの問題が起こりうると考えられる。これに関してはすべて編集者の責任であることを明記したい。

１．第１回研究会（2001年７月25日、於リバティークラブ）

谷　今日はお集まり頂きまして、誠に有難うございます。

皆さんには貴重なお時間を頂いていますので、早速始めさせて頂きたいと思います。

今日は“安全な都市・社会づくりの実現を目指す基礎的研究”について、このプロジェクトの中身をどうするか、さらにどのように進めていくべきかという話し合いを致したいと思います。

私の事前の御報告がスムーズではなかったので、突然お聞きになった方もいらっしゃるのではないかと申しわけなく思うのですが、私の方も突然言われまして、それは前回４月23日の研究評議会で“社会の安全に関する研究”を具体的にやろうということと、財政基盤が弱い本財団の体制の立直しを何とかしようという話し合いがありまして、伊藤会長は幾つかお考えがあるようでしたけれども、社会の安全、都市の安全の研究に関しては、この財団の研究評議員のメンバーを中心に研究会を組んで、最初は奥田先生を代表にということをお考えで「私も奥田先生の下でならお手伝いしていいですよ」という話をしていたら、奥田先生から「全面的な協力はするが、代表は体の具合が万全でないので…」とのことで御辞退されてしまって、「じゃあお前やれ」と突如そういう話になりまして、伊藤会長の教え子の一人ですので、否応なし、そこでの外の先生方も同意下さったので、お引き受けした次第です。

それから慌てて企画書をつくって…、本当はもうちょっと皆さんと事前に相談してから企画書を作成すればよかったのですけれども、何せ時間的なゆとりが全然なくて、とりあえずは、前回少し議論しましたのでその話を踏まえまして、私の独断で企画書をつくりました。その失礼の段はお許し下さい。

皆さんのところには事務局を通じて、それは参考資料として配送されていると思います。

その中で、研究組織についてなんですけれども、本当はもうちょっと色々な方に入って頂いた方が良かったと思うのですが、とりあえず企画書を出す段階では、事前に相談するゆとりがなかったものですから、ここにお集まりの方々、恒松先生、奥田先生、東郷先生は研究評議員会のメンバーでいらっしゃいましたし、それから、私はほかに都市計画学会の方で研究会をやっていまして、そのメンバーでこのトピックに非常にぴったりの方お二人に、私の方から個人的にお願いしました。

お一人は東郷先生の財団法人東京市政調査会におられる吉川富夫さん、それから、清水建設㈱におられまして、主に犯罪関係の方の都市の安全の研究をずっとやってこられている伊藤さん、このお二人を私の方で個人的にリクルートして入って頂くということで、一応組織上の形はつけました。

実際に調査研究を進めていく段において、恒松先生、奥田先生、東郷先生に実際に動いて頂くというよりは、色々アドバイスを頂いて、東郷先生のところは吉川さんがいらっしゃいますから、恒松先生、奥田先生の方でも、どなたか例えばお弟子さんか何かで30代、40代位でバリバリ調査等を一緒に行って下さるような方がいらっしゃったら、是非加わって頂きたいと思っております。

そうしますと、“安全な都市・社会づくりの実現を目指す基礎的研究”を進める体制を、『安全な都市・社会づくり研究部会』と言うことにし、この部会としては、年に３回、あと２回、最後と真ん中に開くぐらいかなという感じでいるのですが、それだけでは研究が進みませんので、『ワーキンググループ』という形で年に５、６回集まって進捗状況等の話し合いなどをやろうと考えております。ワーキンググループのメンバーとして、いま私が考えておりますのは、私と吉川さん、伊藤さん、プラス奥田先生、恒松先生がどなたか推薦して頂ければその人達もというようなことを望んでいるわけです。

恒松　私の方は余りいないから、奥田先生の方がそういうお弟子さんがいらっしゃるんじゃないですか。

奥田　それはもう少し進んだ上で適当な人を選んで…。今は吉川さん、伊藤さんという普通では絶対に一緒にできないような人達をお招きしているわけだから、是非フルに活動して頂いて、その中でまた参加させて頂きたいと思っています。

私もちゃんと役割を担うつもりで自覚していますので、よろしくお願いします。

谷　それから、研究スケジュールですが、当初は6月位に始めようかという形でやったのですが、時間的な都合がつかずに今日になってしまいまして、7月25日の今日が準備会議です。

ここで役割とか分担、さらにスケジュールを確認して、8月、9月位で調査活動、ちょっと暑い時期なので、動くのはもうちょっと遅らせた方がいいのかも知れませんが、その間に資料を集める、あるいはヒアリングを少しやろうと思っていますので、ヒアリングに行けるところを何個所か行くという予定にしたい。

それから、9月から12月に集まった資料等を分析して、補足分の補足調査をし、12月の年末位に研究部会の中間会議みたいなものを開くということを一応考えています。

それから、1月から3月でレポートを作成して、基本的には年度予算ですから、3月半ば位にもう一回部会を開いて、3月末位には、レポートを最終確認して、提出するというようなスケジュールで行きたいと思っています。

このへんの手続的な話をもし皆さんの御承認を頂いたということであれば、内容的な話に移り、ざっくばらんに話して頂くようなことをしたいと思います（「異議なし」の声あり）。

谷　それでは、〈参考資料〉の項目につきましては、目を通されたとは思うのですが、念のためにちょっと御説明します。

研究事業名としては、“安全な都市・社会づくりの実現を目指す基礎的研究”と、長ったらしいのですけれども、それを研究していく組織としては、本財団の中の『安全な都市・社会づくり研究部会』という名称をとらせて頂きます。

どういうことについて研究事業を行う目的としているかと言いますと、今までの社会の安全等の研究を見ていても、例えばセクハラについてとか、個別の犯罪とか個別の危機についての研究はあるのですけれども、社会トータルとしての研究は割とないんですね、そのへんの個別的な問題については少し浅くなってしまうかも知れませんけれども、社会全体としてどのような安全を脅かすような問題があるのだろうか、それがどのように認識されていて、どのような対策がとられているのだろうということを、総合的に調査研究して見てみてはどうか、それに関して都市計画であるとか、社会システムであるとか、行政制度などから、どのような対策が今後とり得るのかという辺りについて、最後に提言するというような研究にしてみたらどうかと考えました。

そのために、まず現在の日本において都市・社会の安全を脅かしている要素はどういうものかというのを、各々の要素を出して、その重要度と緊急度というものを評価する作業をし、さらに、それらの間にどういう繋がりがあるかというのを要素間連関図というような形で、研究ですからもっともな分析ツールをつくらないといけないかなと考えて、こういうものを考えてみました。

それから、都市・社会としてこういう脅かす要素に対して、今までどのように対応してきたか、さらに、今後どのように対応していくことが求められているのか、というような4つの観点から研究を進める。

研究の方法としましては、組織は先程話しましたからいいとして、対象として、前回集まった時のメモも参考にしまして、一応、都市・社会の安全を脅かす要素として8つの分野を考えました。

まず自然災害的要素ですが、台風とか火山爆発とか震災とかこういうもの。それから、環境的要素として、地球環境、ごみ問題、大気汚染、水質などですね。それから、都市型事故的要素としての、火災であるとか、洪水であるとか、交通事故であるとか。それから、都市型犯罪的要素として、従来型というのは従来からある犯罪で、劇場型犯罪、機会犯罪、セクハラ、ストーカー、最近新しく出てきたような犯罪も含んで考える。それから、社会不安的要素ですが、漠然としたものであっても不安があるというような、治安とか政治とか社会一般に対する不安とか、そういうもの。それから、教育的要素として、学校問題、青少年問題、子供の教育問題など。それから、近隣環境的要素、隣人関係、コミュニティー問題、ごみポイ捨て問題など。それから、技術関連要素としては、電波障害、電磁波問題、デジタルデバイド問題などです。以上、8つの分野位で捉えようと考えております。

研究手法としましては、主にマスメディアですが、新聞は縮刷版がずっと出ていますので、比較的調べやすいだろうということで、主要新聞の過去5年間位の記事を調査してみようと思っています。

それから、手法の2つ目としてヒアリングで、このへんをどのへんのところにどうアンケートするかというのは、まだ明確なイメージがないのですけれども、マスメディアだけではちょっと見方が偏ってしまうと思いますので、実際に人々がどういうふうに感じているかという辺りを、市民へのアンケートで調べ

てみようと思っています。

さらに、インターネットを使ってアンケートの数を増やすというようなことも考えられるかなと思っています。

それから、こういうソースから抽出された要素というものを、先程述べました 8 つの分野で分類して、それでメディアでの出現頻度とか取り扱い量、アンケート回答などによって、重要度、緊急度を評価してみようと考えております。

それから、各要素の関連性については、先程の要素間連関図というのをつくるということで、関連性を議論しながら分析してみて、それに基づいてこの研究会で議論して、さらに専門家にもヒアリングして、実際にどういう対応をとっていくのがいいのかという辺りを議論して頂いて、それを最終的な成果という形でまとめようと考えています。

こんなようなことを考えているのですけれども、今日は第 1 回なので、どんなことでもよろしいのですが、もうちょっとこうやったらいいのではないかというお話でも結構ですし、こういう人にヒアリングしなさいというようなことでも結構ですので、是非色々な御意見を頂きたいと思います。

まず、奥田先生からコメントを頂けると有難いのですが。

奥田　この研究対象のところで、大体ここで何を扱うかというようなことは総論的には非常にわかるわけですけれど、ここで開く研究会とか、それに対する予算の問題その他を考えると、既存の資料とか知見でカバーできる分野と、それから、ここで何かオリジナルに少し打ち出すことのメリハリをつけた方がはっきりするのではないかと思うわけです。

私個人で言うと、同じ都市でも割合にコミュニティ・レベルのことをずっとやってきたので、今のこのような時期に、そのへんの「人が住む」ということが、一体どういう意味を今まで持ってきたのか、それを失ったことがどういうツケが都市に出てきているのかというような形ではかなり言えるし、それから、4、5 年前からこの財団の研究評議会でよくお話しした“外国人問題”というのを、ちょうど 10 年間継続調査をずっと続けてきたわけで、それについても色々と提示し得ると思います。

そうすると、外国人問題というのは、外国人自体が現在のこういう社会不安を起こす源になっているようにとられるのですけれども、我々の調査からすると、新宿でも池袋でも、ずっと居住歴を持つ人達がいま移動し始めているというのは、大体が結婚し子供がいるということもあるのですけれども、やはり日本の今の都市環境というのが、何か非常に不安であるということに起因している。と言うのは、日常的に何かが起こるということよりも、テレビの影響もあるのだと思うのですけれども、非常に不安なニュースなどが多いことが、自分達が今まで日本の社会にイメージしたものと非常に落差があって、このまま日本に住み続けることに不安を覚え、他に移り出すという時期にちょうど来ていると思うのです。ちょっと変ですけれど、新宿であれ池袋であれ、彼等が、特に子供の将来の問題を考える時に、不安だから場所を移るというような問題が出てきていると思います。

だから、そういった外国人問題を都市問題の一部に載せさせて頂いたけれども、そういう問題についてオリジナルに 10 年間のデータが割合にあるので、もしこの部会で活用させて頂けたら、ここのテーマに読み替えることは可能だと思いますので、そういう点で提案させて頂ければと思っています。

谷　先生がおっしゃるテレビが増幅している面というのは、伊藤さんと話した時もそういう話が出て、多分、メディアによって、実際の不安のタネがある部分だけ増幅されて、または意外と増幅されないで、本当は危険なのだけれども認識されていないでというか…。

奥田　それはやはり、日本で生活している日本人の場合にはそのへんの調整が可能だと思うけれども、外国の人にとってはテレビの持つインパクトというのが非常に強いですよね、それは新聞報道その他でもそうだと思うけれども。

日本のメディアは、多くの外国人とか背景の違う人達と生活している都市という認識がないから、ついそういう普通の日本人の読者層とか視聴者というイメージでしか報道していないですよね。だから凄いインパクトが強いというか、非常に不安材料になり出している。テレビに出るというと、御承知のような話、ここで言う劇場型犯罪みたいな話ばかりが出てくるというのが、外国人が原因というより、彼等が何よりも不安に思っているのです。

恒松　今お話に出ましたけど、“劇場型犯罪”というのはどういうものですか。

谷　これは伊藤さんが専門ですね。

伊藤　学術用語ではないのですけれども、いわゆるワイドショーで取り上げられて、一般国民がある種の興味を持って見る、もしくは見ることを期待して起こすような犯罪。例えば例を挙げますと、昨年のゴールデンウィークに起きた高校生のバスジャックがありましたよね、ああいうもの。
自分が犯罪をすることを、あたかも自分がその犯罪の主人公になり切って、人がこう自分を見ているだろうというようなことを意識しながらやるような犯罪を劇場型犯罪と…。
恒松　それは今一般に使われている言葉なんですか、“劇場型犯罪”と。
伊藤　学術的にはまだ使われていないと思いますけれども、一般的には、テレビでコメンテーターが既に使っていますね。新聞でも使われています。
東郷　ある種の目立ちたがり屋的な、そういう犯罪を言うのでしょうか。
伊藤　そうですね。
吉川　この間の小学生を殺したのも、それに入ります。
伊藤　ああいうのもそうかも知れないですね。
恒松　あの池田小学校のね。
東郷　ああいうのは、今のお話からすれば、その範疇になるような気がしますね。
伊藤　錯乱状態になっているとそうではないのですけれども、いわゆるちゃんと意識を持って、自分がこういうことをやったら、社会にどういうふうに影響を与えるかということをわかっていてやっていますよね。この前の小学校もそうですし、去年のバスジャックなんかもそうだと思うのですけれども、そういう見られていることを意識しながらやるような犯罪ですね。
恒松　それから、奥田先生の専門ですが、いま外国人に対して同情的と言うとおかしいんだけれども、そういうふうに仕向けた日本の社会もやはり問題にしなくてはならないというようなお話じゃなかったですか、私の聞き違いかも知れないんだけれど。
奥田　外国人と言うと、外国人が加害者になる外国人犯罪という形に受けとめられるけど、より多くの人は居住者としているという時に、むしろ被害者の立場なのです。
　だから、そういう意味が日本人以上に強く受けとめがちであるものですから、将来の先行き、住んでいる都市環境が一体どうなるかということは、同時に日本社会がどうなっていくかということと結び付きます。だから自分のときはまだ何とかやりくりするけれども、いま日本で生まれた子供達が中学に入り始めていますが、そういう先をずっと考えると、もうこの際帰った方がいいのではないかとか、他所に移った方がいいのではないかと、現在は選択のぎりぎりの時期に来ているということです。
　普通に考えると、外国人がやった犯罪じゃないかというイメージが、マスコミその他では非常に強いわけですけれど、逆ですよね。外国人犯罪で一番困るのは外国人。
東郷　たまたま奥田先生からその問題提起があって、私も少しそのへんのお話を調べてみたいなと思っていたのですが、奥田先生は専門家でいらっしゃるので御教示頂ければと思いますが、私なんかは、今のお話を伺っていると、恒松先生の考え方に近いのかも知れないのですよ。と言うのは、確かにメディアの取り上げ方も問題があると思うし、ただ、ここでは奥田先生はどちらかというと、実際に居住している外国人の立場から云々、だからそこが…。
奥田　居住者というところです。
東郷　居住者をちゃんとしなければいけないというような面が…。
奥田　外国人という立場をとっている人達と、そうでない立場からということです。
東郷　そういう側面はわかるのですが、都市行政を先生もやっておられるわけですけれども、メディアが何とかし過ぎるという側面もあるとは思いますが、ただ、実際のデータだとか、犯罪の増だとか、客観的な事実としてあることも確かなわけですよね。
　私は、今回の問題だけではなしに、そのうちまた本などを書く時に、それを一つのファクターとしてきちんと入れておきたいと思っておりますのは、例の出入国管理と難民認定法の改正の問題も含めて、これが都市問題に対してどれだけのインパクトを持つかというのが、私が生きている間は大丈夫なのかも知れませんが、そこから先、かなり色々問題があるのかなと考えています。
　何かの時に申し上げたことがあるかも知れませんが、国連の考え方というのは、世界人口のトータルで埋め合わすと言いますか、日本で少子化とか高齢化と言われている時に、世界でどこかが高齢化し少子化、それは全体的な傾向でもありますけれども、その部分は外から持ってきて埋め合わせればいいじゃないか